

研究分野	資源管理	機関・部	水産総合研究所・資源管理部
研究事業名	資源評価調査委託事業(ヒラメ稚魚分布密度調査)		
予算区分	受託研究((独)水産総合研究センター)		
研究実施期間	H12～H25		
担当者	吉田 雅範		
協力・分担関係	なし		

〈目的〉

本県沿岸域における天然ヒラメ着底稚魚を対象に試験操業を行い、継続的に分布密度を調査し、ヒラメの資源動向を把握する。

〈試験研究方法〉

日本海(つがる市沖)、太平洋(三沢市沖)の水深5m及び10m各4点の合計16点で調査を行った(図1)。調査月日は日本海で平成21年7月22日、8月11日、8月26日、太平洋で7月28日、8月18日、9月15日であった。漁船を用船し2ノット前後の速度で原則として10分間桁網(水工研Ⅱ型、目合6mm)を曳いた。入網した異体類を氷冷した後、種ごとに尾数と重量を測定した。ヒラメ稚魚については全長、体重を測定した。

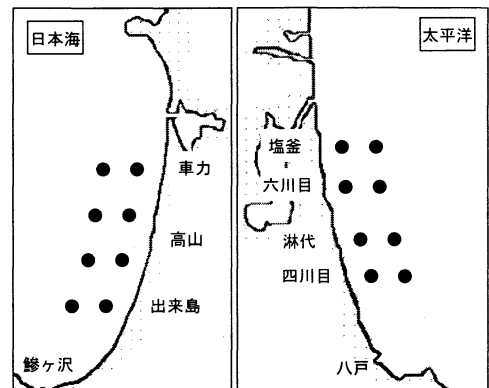


図1 調査地点

〈結果の概要・要約〉

- ・ヒラメの分布密度は日本海で3～125尾/1,000m²、太平洋で0～85尾/1,000m²であった(表)。
- ・採集したヒラメの全長モードは日本海では7月22日に30mm台、8月11日及び26日に40～60mm台であった。太平洋では8月18日に60～70mm台、9月15日に120～130mm台であった(図2)。
- ・水深別平均分布密度の最高値を着底指数とすると、日本海は69と低い水準であった(図3)。これまでの調査結果から、日本海の着底指数と翌年1才魚の資源尾数との間に正の相関が見られる。21年の水準が低いことから、2年後の漁獲対象資源も低い水準になると考えられた。
- ・太平洋の着底指数は63と平成20年より高くなった(図3)。着底指数の高かった平成11、16年には翌年1才魚までの生残が良かったことから、平成21年産まれも生残が良いものと考えられる。

〈主要成果の具体的なデータ〉

表 調査地点別分布密度

日本海				(尾/1,000m ²)			
調査月日/調査点	水深 5m			水深 10m			
	出来島	高山南	高山北	車力	出来島	高山南	高山北
7月22日	30	53	122	66	5	31	27
8月11日	6	56	16	125	33	61	8
8月26日	3	8	21	27	19	8	20

太平洋				(尾/1,000m ²)			
調査月日/調査点	水深 5m			水深 10m			
	四川目	淋代	六川目	塩釜	四川目	淋代	六川目
7月28日	2	2	0	0	0	0	6
8月18日	80	66	75	31	79	73	85
9月15日	2	8	0	3	16	6	0

* 桁網効率を0.28として算出した。

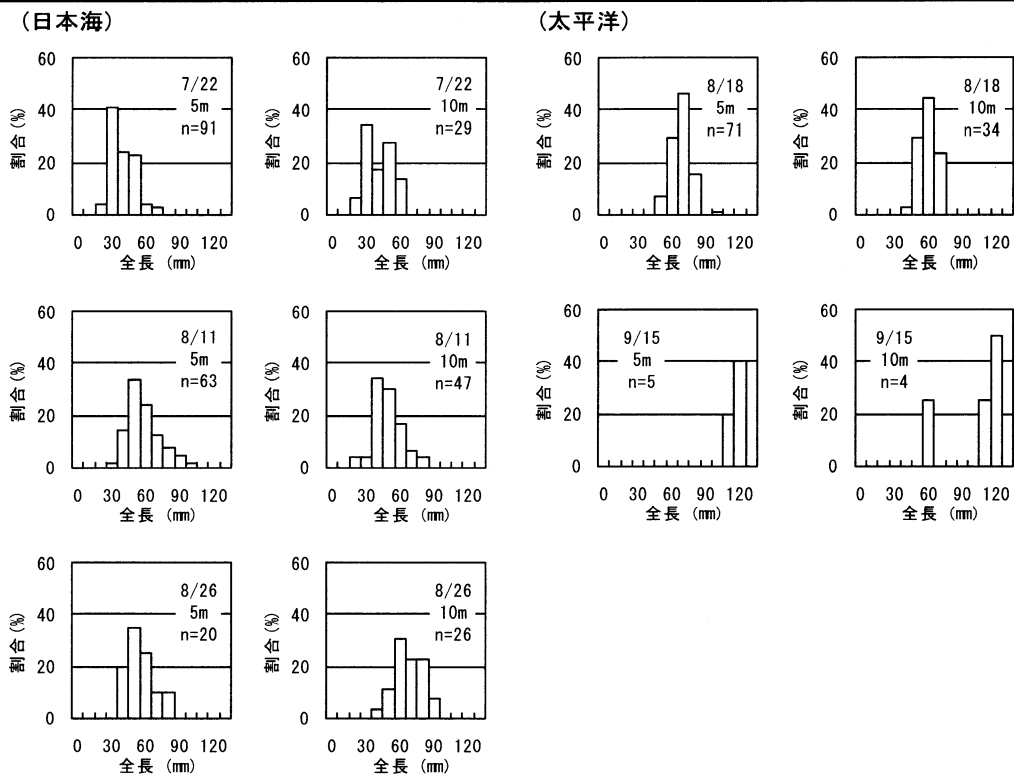


図2 ヒラメ稚魚の全長組成(左が日本海、右が太平洋)

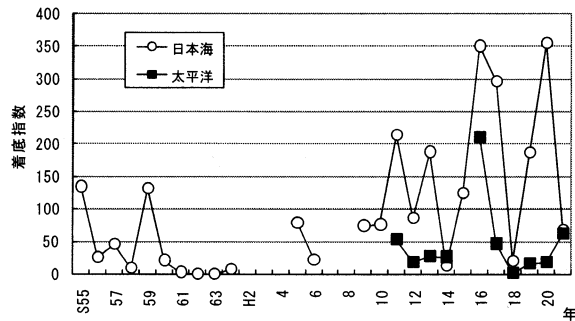


図3 ヒラメ着底指数の推移

〈今後の問題点〉

ヒラメの浮遊期間、着底サイズ、着底時期、アミ類の分布量等を調べる必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

同様の調査を行う。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成21年度東北ブロック底魚研究連絡会議、平成21年度日本海ブロックヒラメ分科会、平成21年度日本海地区、陸奥湾地区及び太平洋地区の各漁業者協議会で発表し、ウオダスに掲載した。